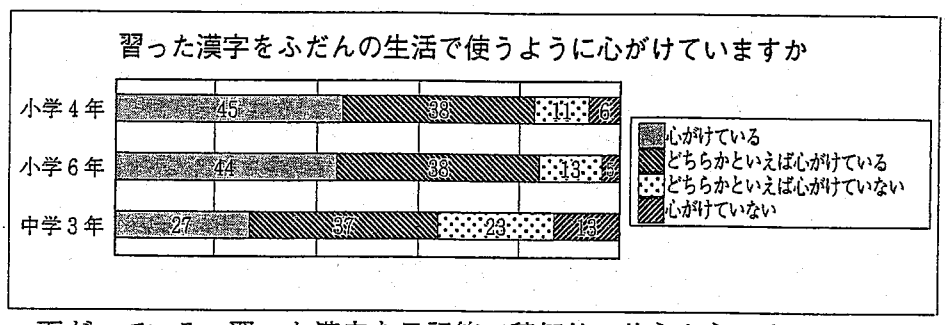
(2) 教科に関する意識の傾向

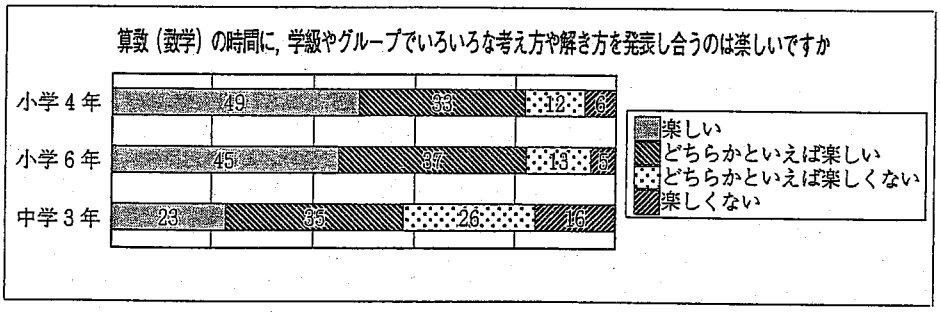
習った漢字をふだんの生活で使うように心がけている・どちらかといえば心がけている児童生徒の割合は，小４で83%，小６で82%，中３で64%である。



【考察】

小４，小６では80%を超える児童が習った漢字をふだんの生活で使うように心がけているが，中３になると約60%程度に下がっている。習った漢字を日記等で積極的に使うようにするなど，学校での学習を日常生活に生かす取組を家庭と連携しながら進めていくことが大切である。

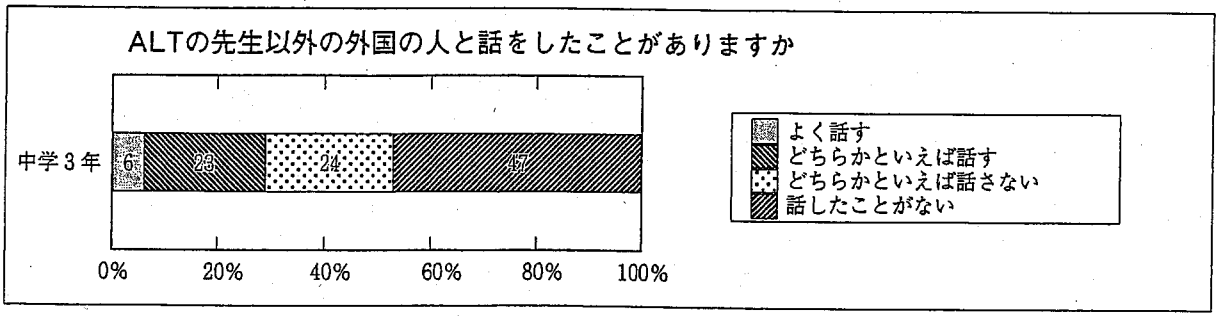
算数（数学）の時間に，いろいろな考え方や解き方を発表し合うのが楽しい・どちらかといえば楽しいという児童生徒の割合は，小４で82%，小６で82%，中３で58%である。



【考察】

算数（数学）の時間に，いろいろな考え方や解き方を発表し合うのが楽しいと答えた児童生徒の割合は，小４と小６は，82%，中３では58%であり，中学校において低い傾向がみられる。中学校において発表し合うことを楽しいと答える生徒が少なくなることから，生徒の主体的な取組を促すなど，指導方法のさらなる改善が求められる。

ALT以外の外国の人とよく話す生徒の割合は６%である。



「ALT以外の外国の人と話をしたことがありますか」という設問では，「よく話す・どちらかといえばよく話す」と答えた生徒を合わせると29%で，約70%の生徒がALT以外の外国の人と話したことがないことがわかる。このことから，学校でのALTとの授業は，外国の人と話す重要な機会となっており，一層の充実が必要であると言える。